

19世紀後半のウィーンのカフェ文化に関する議論

富樫豊主催による研究談話会における思想的交流を通じた人間存在の諸相に関する省察 (3)

VIENNESE CAFÉ CULTURE IN THE LATE 19TH CENTURY

Reflections on the Human Condition Through Dialogical Engagements with the Transdisciplinary Research
Colloquium hosted by Dr. Yutaka Togashi, Part 3

岡田 成幸¹, 佐久間 博²

Shigeyuki OKADA and Hiroshi SAKUMA

¹北海道大学名誉教授, 工学博士, 地震防災計画学

Hokkaido University, Professor Emeritus, Doctor of Engineering, Earthquake Protection Planning

²アトリエ佐久間一級建築士事務所, 代表, 一級建築士, 建築設計

Atelier Sakuma, Licensed First-Class Architect Office (Japan), Representative Director, First Class Architect, Architectural Design

要約

本論文は研究談話会 E-mail 往復書簡シリーズの第3弾であり、19世紀後半のウィーンにおけるカフェ文化を通して、人間存在の在り方と知的創造の場の意義を省察するものである。市民革命以降の社会変動と個の自立が進む中、ウィーンのカフェは、階層や専門を超えた自由闊達な対話の場として機能し、芸術・建築・科学技術など多分野にわたる革新の温床となった。特に、様式美から実用美への転換を促した建築のモダニズム運動や、専門性の枠を超えた知的交流が科学技術の発展に与えた影響に注目し、現代における学際的対話の意義を再考する。カフェ文化の歴史的背景とその終焉を踏まえつつ、現代社会における「自由な議論の場」の再構築の可能性についても示唆を与える。

Keywords: *Café Culture, Viena, Autonomy of Individual, Anarchy*

カフェ文化, ウィーン, 個の自立, 無政府状態

I. はじめに ~ウィーンのカフェ文化概要~

2021年10月1日(金)の談話会において、佐久間先生からカフェ文化のプレゼンがありました。



発表主旨を代表の富樫先生による議事録から簡単にまとめると以下のようになります。

佐久間委員の発表趣旨: 19世紀後半、市民革命とナポレオン戦争により民族意識が芽生えた頃、ウィーンではオスマントルコの撤退の後、コーヒ

ー飲用が始まる。世は自由と平等を第一とする「個の成立」を主張し議論が活発化する土台ができあがってきた。人々は個人では解決できない複合的な課題を持ち寄り、議論を好んだ。当時の住宅環境は良好とは言えず、そこにカフェ空間というアナーキーな空間が出現し、カフェ文化が育つ条件がそろった。カフェ空間は狭く共同体意識が保てる距離として適切であった。人々はそこで、自由な議論を楽しみ、多様な価値観の衝突により新しいものの見方や対外的緊張感が養われていった。このような自由討論に対し、為政者も慣用的であり、カフェ文化が育つに至った。しかし、ナチスの台頭により、自由な行動・発言が抑制されるようになりカフェ文化も終焉を迎える。

II. カフェ文化の時代背景について

■2-1. 岡田→佐久間: リモートの中での質問

2021年10月1日

リモートの音声状態が悪く十分に聞き取れなかったので質問のみします。後で文書回答をお願いします。

- ・ 質問1：19c 後半のウィーンにおける創造の場をとりあげているが、ルネサンスや科学革命が一段落したこの時期においてどのような創造があったのか？この時期を取り上げた理由は？
- ・ 質問2：自由や快適な場を求めた結果がカフェ文化に到達したようであるが、なぜカフェなのだろうか？居酒屋のような場でも同様の文化は生まれなかったのだろうか？
- ・ 質問3：今はやりのサイエンスカフェとはどこが違うのか。今のサイエンスカフェにウィーンのカフェを活かすことを考えると、何が有効だろうか？空間的な工夫とか参加者の意識やモチベーション・社交性の有無など・・・。

■2-2. 佐久間博→岡田:質問(岡田■2-1.)への回答

2021年10月4日

ハプスブルグ家の支配していた領域は、僕らが歴史の教科書で知っている西洋に比べると、随分違った文化・文明圏で、いつも、イタリアやフランス、後年はその西のイギリスに対する憧れ、あるいは後進意識があるように思います。それが18Cの啓蒙的専制君主の時代を経て、18C末のナポレオン戦争により、いわゆる近代的自我と合理的(科学的)精神が末端の民衆にまで伝わったわけです。そこから発生した民族意識、技術革新、社会構造の変化は、それまでの権力者と対立する形となっていました。それが19C前半のメッテルニヒ(=ビスマルク)の時代です。その対立が頂点に達したのが1848年の革命で、それ以後の社会構造の変化は、後進的であったがゆえに凄まじく、19C末のハプスブルグ家領は、ほとんど日本の明治期と同じような追いつけ追い越せの雰囲気だったと考えられます。

その状況の中で、様々な分野で19C末の最先端とも言える世紀末文化が花開いたのは何故かというのが、僕の興味の発端です。

カフェと居酒屋については後参照

サイエンスカフェとウィーンのカフェ文化の違い。これはどちらもよく知らないのですが、想像ですが、そこに目標、到着地点が想定されているかいないかという気がします。カフェはなんの制限もありませんから、参加者も多士、おそらく話題は脱線のしまくりで、後はそこでヒントを基に各自が考える(=正解はない)というスタンスだったのではないかと思います。

うまく言えませんが、自立した個人の存在という前提と、世の中として正解の見つからない問題が至るところにあり、なんとか自らの力でその解決を図ったということのように思えます。

清水幾太郎が昭和22年の「主体性の客観的考察」で、「哲学への欲求の根底には(中略)、実質的且つ包括的な真理を一挙に決定的に得たいという願望、而もこれを出来るだけ単純な命題の形式で掴みたいという願望がある」と述べていますが、これが自力で行われるものでなければ、ウィーンの19C末のような状況は生まれ得ないと思います。

ウィーンでカフェと言うと、日本の純喫茶よりはむしろ居酒屋に近い。伝統的なカフェには、必ずアルコールがあり、ゲームコーナーがあり、歌があり、ダンスがあります。当時、なぜそこで創造に結びつく議論が湧き上がったかという、僕は、新聞(という新しい情報媒体)の力が大きかったと思います。

当時のウィーンは混乱混沌の中でありましたから、あらゆるものが同じ平面上にあったのではないかと思います。分野、階層を限定すること無

く、個人の興味だけでそこに自由に参加でき、同じテーブルで、政治から先端科学、美女談義に至るまで議論できたのだと思います。

今のウィーンの有名な、いわゆるカフェは、観光客向けのもの。情報交換の手段も多様化し、楽しみ方も様々、当時のようなカフェ文化は衰えている。19世紀末のカフェ文化はウィーンが特殊な場(状況)だったから成り立っていたのであろう。

III. カフェ文化の影響の大きさについて

■3-1. 岡田→佐久間:追加質問

2021年10月27日(水) 13:13

岡田です。拙問に丁寧にご回答頂き、有り難うございます。

大学受験で世界史を選択しなかったため、知識が大きく欠落していましたところ、興味深いお話をご提供頂き、大変おもしろく聞かせて頂きました。当日は音声不調のため、十分聞き取れなかったところもありましたが、拙問に対するご回答で背景を理解し、レコーディング動画を再度見直し納得しました。

先生のご回答の中で、カフェ文化の条件として「自由」が強調されていたと思います。議論の目標・到達地点が想定されていないなかでの「自立した個人」として思考を巡らせること。これがカフェ文化を遺産として後年に伝えた一因というお考えには納得です。正に、当研究談話会の姿そのものような感じも致しました。

そういう理解の元ではありますが、再度お伺いしたいことがあります。

(1)ウィーンのカフェ文化は多くの芸術・文化に影響を与えたと思いますが、佐久間先生がお考えになる最大の果実は何だとお思いでしょうか。

(2)本研究談話会のテーマ的キーワードに「これからのあるべき科学技術」があります。カフェ文化がその後の「科学技術」に与えた影響は、何かあるのでしょうか。

(3)佐久間先生が、「ウィーンのカフェ文化」を本研究談話会で取り上げられた思いは、どこにあるのでしょうか。

新型コロナ禍で、文科省の上意下達で大学がリモート講義をせざるを得ない状況となり、大学教員達は慌てました。しかし実施してみても先生達は気づいてしまったのです。リモートだけで大学教育(ただし卒論指導は除く)はできてしまうと言うことに。しかし、リモート授業が続くことを批判するコメントがSNS等で見かけるようになってきました。講義・議論・コミュニケーションそして学生にとっての大学という「場」の問題です。カフェ文化が花開き、そして終焉していった背景には歴史的な社会情勢が大きく関与していたというご説明もありましたが、うまく機能する条件を我々は学びたいと思います。

■3-2. 佐久間→岡田:追加質問(岡田■3-1.)への回答

2021年10月30日(土) 14:22

返信、遅くなりました。

(1)ウィーンのカフェ文化は多くの芸術・文化に影響を与えたと思いますが、佐久間先生がお考えになる最大の果実は何だとお思いでしょうか。

僕の感じているところですが、最大の成果は、それまでのほとんどすべての枠組みを壊し、原点に帰った、ということではないかと思います。

建築の分野で言えば、それ以前の建築の課題は「様式の完成」でした。古典主義、ロマン主義云々と言われますが、フレッチャーの建築史に代表される、様式（形・姿）としての建築の完成だったと思います。

そこに、工（構）法の面では、新素材、新工具・道具が現れたこと、それらの成果として新設備、またそうしたものを生産し、流通させることから生じた、社会構造の変化、新しい社会インフラの必要とそれらに与える可能性、つまり、新しい空間の必要性が生じたことにより、「様式の完成」は建築の課題では無くなり、ゼムパーやワグナーが言った「必要だけが主人である」という考え方に変わっていったことだと思います。

その結果として、「ゼツェッション」が生まれるわけです。他の分野でも同じような動きだったと思います。

(2) 本研究談話会のテーマ的キーワードに「これからのあるべき科学技術」があります。カフェ文化がその後の「科学技術」に与えた影響は、何かあるでしょうか。

カフェ文化の最大の特徴は、あらゆる分野が同じ平面上に等価で存在する、ということではないかと思っています。その結果か、あるいはもとの体質なのかはわかりませんが、僕の経験したことで面白いと思ったことを書きます。

- ・大学の専攻が副科制を採っていること。主専門の他にもう1つ別な何かも学習しないといけないので、いわゆる「専門バカ」にならない。
- ・僕はたまたま、1978年の原発稼働是非国民投票の時にウィーンにいたのですが、その投票前の学習集会を覗いたとき、色んな人が色んな意見を言い、専門家らしき人が一生懸命説明し、質問をしていました（内容は殆ど解らなかった）。後で友人に訪ねたところ、核関係の技術者だけでなく、医療、経済、社会学・・・と色んな人がいたことと、中学生くらいの子供から老人まで老若男女、集まっていたことが印象的でした。

その後にあったウィーン市の交通計画の説明会でも同じようでした。

- ・構造力学の授業も歴史で始まる。日本で構造の授業といえば、物理の法則による現象解析だと思うのですが、それが歴史で始まりました。ギリシヤ人はこう考え、ローマに入ってこれが解ってあの大建築ができ、それを展開してゴシックになり、アーチの解析が進んでバロックの空間ができた・・・、というような話でした。

総じて、社会とのつながり、過去とのつながりが意識されているように思いました。

(3) 佐久間先生が、「ウィーンのカフェ文化」を本研究談話会で取り上げられた思いは、どこにあるのでしょうか。

僕は、一介の市井の建築の設計者です。日常の仕事の中で思うのは、人にはそれぞれの思いがあり、それらが集合してある形に収斂するという。災害対応と言っても、それに関係する個人、地域、時代によって様々で、一義的に「これ」というものはあり得ないと思っています。

そんな状況で、より良い方法を見つけるにはどうしたら良いのかということのヒントになるかと思いました。

日本は、一応、民主制の国で、国民も大多数が高等教育を受けています。しかし、例えば今のコロナへの対応を見ても、その施策が民主的とも科学的とも思えません。どうしてそうなっているのかという疑問です。

岡田先生が取り上げられた、防災（災害復旧）支援が最弱者のところには行っていないという構造の指摘は、ショックでした。自分も薄々そう感じていましたが、何故なのか解らないまま放置していました。

以上、答えになっていないかも知れませんが・・・。

IV. カフェ文化とパラダイムシフトのアナロジーについて

■4-1. 岡田→佐久間:御礼

2021年10月30日(土) 18:56

再度の質問にもかかわらず、丁寧に解説頂き、また持論の展開もあり、佐久間先生の話題を私の世界観から大変身近に受け止めることができました。

19世紀のウィーンのカフェ文化の最大の成果は、ルネッサンス→バロック→新古典主義と作り上げてきた「様式美」から実用美のモダニズムへの転換を与えたことだったということでしょうか。かつて私が当研究談話会で取り上げた科学哲学者トーマス・クーンの「転換」による科学革命論とアナロジーを認めることができます。彼は、型にはまった旧守の前科学の累積的進歩（代わり映えのしない上塗的研究、と野家は超訳しています）を革命的に進化させる要因は、他領域からの批評による断続的変革（累積的進歩と対比的表現に注意）であり、これをパラダイムシフト（転換）と名付けました。建築デザインと科学との転換の時代は若干ずれてはいますが、型を追求した様式美の完成を突き動かしたのが19世紀のウィーンのカフェ文化の持つ「専門性の枠組みからの逸脱」であったなら、科学の世界もB.C.4世紀のアリステレス的自然観に基づく天動説を転換させた16～17世紀に起こった科学革命も、ガリレオ・ニュートン・デカルトといった科学進歩史観というこれまでの自然観とは異なる批評（＝ある種の当時の常識からの逸脱）がもたらしたものであるということで、軌を一にしている感があり、ウィーンのカフェ文化の重要性が再認識できました。

なお、欧州の科学史における19世紀は、科学が制度化された時代、すなわち科学から儲かる技術の時代へ移行した転換点であり、熊澤先生が言う「現代技術の本質はヒューマンエラーにある」の時間原点であろうと、私は理解しています。

佐久間先生が言及されている科学技術教育において、欧州では専攻を2つ選択する義務があることに触れられていました。実は、私が教鞭を執っていた北海道大学工学研究院は、正にその教育体制を試行していました。主専攻（専門）と副専攻（専門外の専攻からカリキュラムを選択する）を義務化した双峰型教育と名付けていました。当初は学生に過度の負担を強いたものと評判はさんざんでしたが（副専攻では、学部教育を受けずに、いきなり大学院レベルのゼミが、主専攻の学生と同じ教室でなされるわけですから、無理というものです。）、先生たちも学生の実力をその後理解し、大学院の講義も総説レベルにダウンさせたものも用意されるようになり、学生の視野は広がってきたように思います。その分、主専攻の講義レベルがダウンしたとの批判もありますが。私は、双峰型教育の成果を十分に吟味する前に退職したので、現状はよく分かりませんが、学生の知識のタコツボ化は幾分避けられているのではないのでしょうか。最近、再びリベラルアーツ教育の重要性が叫ばれるようになってきたのは、良い兆候かと思っています。

重ねまして、興味の尽きないご回答を有り難うございました。これからも、ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。

岡田成幸

■4-2. 佐久間→岡田

2021年10月31日(日) 14:50

岡田先生

CC. 富樫先生

恐縮至極です。

今まで、自分の中でなんとなくこういうものだろうと納得していたものを外に出したことで、新たな視点を頂き視界が開けたように思います。

私の方こそ感謝ですし、これからもよろしく願いいたします。

V. 研究談話会活性化へ向けての提案

■5. 岡田→富樫: 討論メールの委員への配信のお願い

2021年11月3日(水) 11:02

思ったのですが、先日来続いている我々のメールも、懇談会の内容理解を深める意味で、公開し他の委員のご意見を頂戴することは有効ではないでしょうか。研究談話会でのリアルタイムでの議論は熱い中での意見交換で刺激的ではありますが、全員が話し合いのポイントについていっているか、疑問な点もあります。少し時間をおいて冷えた頭でのメール討論も、私の経験では、より理解が深まります。

木俣+富樫+岡田鼎談のメール（社会資本に関する討論）と、佐久間+岡田のメール（ウィーンカフェ文化に関する討論）を、関係の方々のご了承を得た上で公開して頂けるとありがたいです。特に佐久間先生とのメール交換では、熊澤先生の話も引用させて頂きましたので、ご本人の主張と乖離がないかどうか不安な点もあります。

以上、ご検討頂けると幸いです。

なお、本稿は日本建築学会「人為的要因による自然災害の防止に向けた技術・社会に関する特別委員会（第二次） 富樫豊委員長」の報告書（人為的要因による震災の防止に向けた技術・社会のあり方について（第二次）報告書, PP. 252, 2022年3月）. に所収されている『カフェ文化論議』に加筆したものである。

[了]